# 和戦前傑作落語全集

第二巻

講談社

昭和戦前傑作落語全集　第二巻
定価　一六〇〇円
昭和五十六年十二月二十日　第一刷発行

発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
郵便番号一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京(〇三)九四五　一一一一(大代表)
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
©講談社一九八一年
*落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN 4-06-144522-7　(文芸)

# 昭和戦前傑作落語全集　第二巻　目次

胴乱幸助……五代目 三遊亭円生 5
盃の殿様……八代目 入船亭扇橋 22
芝居狂……六代目 春風亭柳橋 44
権助芝居……五代目 蝶花楼馬楽（林家彦六） 54
帝国浴場……四代目 柳家小さん 71
しの字嫌い……六代目 橘家円蔵（六代目三遊亭円生） 83
但馬の殿様……三代目 三遊亭円馬 97
星野屋……二代目 柳家小せん 111
凱旋（がいせん）……柳家金語楼 126
蚊いくさ……五代目 三遊亭円生 139
木の葉（こは）狐……四代目 柳家小さん 154
寝床……四代目 柳家小さん 167

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

円タク……三代目 三遊亭金馬 182
馬子茶屋……二代目 林家染丸 194
生活新戦術……六代目 春風亭柳橋 211
藪入り……三代目 三遊亭金馬 224
紐落し……二代目 林家染丸 243
お化け長屋……四代目 柳家小さん 256
粂の仙人……七代目 三笑亭可楽 276
塩屋……七代目 三笑亭可楽 291
にらみ返し……七代目 三笑亭可楽 303
恪気の独楽……七代目 春風亭柏枝（八代目 春風亭柳枝） 321
テレスコ裁判……三代目 三遊亭金馬 339
花見小僧……八代目 桂文楽 350

真田小僧……三代目 三遊亭金馬 365
竈（へっつい）の幽霊……七代目 三笑亭可楽 378
堪忍袋……三代目 三遊亭金馬 393
解説……矢野誠一 404

装幀・及部克人

# 胴乱幸助

五代目　三遊亭円生

人間として道楽のない者はないと申します。あの人は酒も飲まず、勝負事も嫌いかと思うと、マッチのペーパーを集めたり、駅弁当のペーパーを集めて喜んでいる人がある。何のためになるんですか分りませぬが、当人には楽しみだというから面白うございます。

○「オイそこにいるのは留じゃアねえか」

△「あゝ兄いか」

○「何だって、そんな所に立っているんだ」

△「何ね、今朝仕事に行こうと思ったら、パラ〳〵と雨が降って来た。仕事を休んだらこんない天気になった。癪にさわるから、天道のやつを睨みつけているんだ」

○「馬鹿だなア、天道を睨んだって仕方がねえじゃアねえか」

△「睨んだら少しは懲りるだろう……」
○「何を言やアがるんだ。仕事が休みなら、一杯飲もうか」
△「おごってくれるのか」
○「おごるというほど、乃公だって懐ろが温かアねえ」
△「それは分ってる。友達も皆んなそういっている」
○「何をいやアがる。乃公は銭はねえが、今に酒樽が転がって来る」
△「どこへ……」
○「どこへというやつがあるか。お前あの爺を知っているか。今あの小間物屋の前へ来る、ホラ、風呂屋の前よ、酒屋の前だよ、ソレ呉服屋の前……」
△「そう云ったって分らねえじゃねえか」
○「だって向うはズン〳〵歩いているから、変って行くんだ。ソレ見ろ、今かまぼこ屋の前を歩いているだろう。腰へ大きな胴乱を下げてよ」
△「胴乱……あゝあの何か、鞄みたような物を下げているのか」
○「あれは昔は軍人が鉄砲の弾丸を入れたんだとよ。それから後印形を入れたり、薬などを入れて歩いたんだとよ。乃公の子供の時分には、学校へ持って行く鞄のことを、胴乱といったぜ」
△「そうかね、あの爺さんお前知っているのかい」

○「あれが酒樽なんだ」
△「へエー、乃公が見ちゃどうしても人間だが、あれが酒樽かね」
○「何をいやアがる。酒樽が歩くか。あれはこの横丁の薪屋の爺じゃアねえか」
△「あっそうか、どうもおかしいと思った。じゃア薪屋を廃めて、酒樽屋になるのかい」
○「そうじゃアねえ、分らねえな。あの爺は若い時に丹波の篠山から出て来て、まっ黒になって働いて横丁へ薪屋の店を出したんだ。それが今じゃアだいぶん財産が出来て、自分も老る年だ、忰に家を譲ってしまって、そうしてブラ〳〵呑気に歩いているんだが、何しろ若い時分から食う物も食わねえで稼ぎづめだから、いまだに芝居一つ見たことがねえ。活動も寄席も行ったことがねえ。だから義太夫がどういうものだか、講釈や落語がどういうものだか、浪花節がどういうものだか分らねえんだ」
△「へエー、して見るとあの爺は何にも道楽はないんだな」
○「ところが妙なもので、人間は何かしら道楽があるものだ。あの爺の道楽というのが、人の喧嘩の仲裁に入って、一杯飲まして、どうだ乃公はえらかろうと、親分気取で威張ろうというのが、あの爺さんの道楽なんだ」
△「変な道楽だな」
○「この間も煙草屋の赤犬とかまぼこ屋の黒犬と嚙み合いの喧嘩をしていた。するとあの爺さん

が通りかゝって、乃公に任せろ任せろといった」

△「犬が何といった」

○「犬が口をきくかい。相手が畜生だ、分らねえから噛み合っていると、爺さん考えて、魚屋へ行って、魚のアラを買って来て、これを食って仲を直せといって投ってやった。犬は喜んで魚を食っていたが、食ってしまうと又噛み合いを始めた。スルと爺さん又魚屋へ行って、アラを買って来て、犬にやった。犬はそれを食った。食ってしまうと又喧嘩を始めた。又アラを買いに行った。又食ってしまうと噛み合いだ」

△「兄い、何日まで続くんだ」

○「一日犬にくっついていたよ」

△「変な爺さんだな」

○「それが道楽なんだ。だから、爺さんが向うから来るのを幸い、乃公とお前と合対喧嘩をするんだ」

△「そうして魚のアラを食うのかい」

○「何を言やアがる、犬といっしょにするな。二人で喧嘩をしていれば、あの爺さんが仲裁に入って、仲直りというので料理屋か何かへ連れて行く、一杯飲めるじゃアねえか。だから酒樽が転がって来るというんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

△「なるほどそうか。そうして合対喧嘩って、どうするんだ」
○「訳はねえ。乃公がこゝに立っているから、お前が向うから来て突き当るんだ。それから乃公が、何をしやアがると怒る、お前が、乃公の方から突き当ったんじゃアねえというんだ。ふざけたことをいやアがるなと、乃公がお前の横ッ面をポカポカッと殴る、何も突き当ったぐらいで殴らねえでもよかろうとお前がいうのを、乃公が生意気なことをぬかしやアがるなと、お前の足をすくってひっくり返して、下駄で踏んづけて痰をひっかける。サアまごまごすると殺しちまうぞと乃公がいうと、お前がサア殺してくれ……」
△「オイ、ちょいと待ってくんねえ兄い。それじゃア殴るのがお前で、殴られるのが乃公だ。下駄で踏んづけるのがお前で、踏んづけられて痰をひっかけられるのが乃公だぜ」
○「そうよ」
△「御免蒙ろう。乃公には一つもいい所はねえ。その上殺されてたまるものか」
○「馬鹿だなア、本当にやるんじゃアねえ、殴る真似だよ」
△「真似か……」
○「けれどもはずみで二つ三つポカと行くかも知れん」
△「それがいけねえんだ。それに、左の頬ぺたはよしてくれ、腫物が出来ているんだから、右の方にしてくれ」

○「よし〳〵心配するな、……サア早く突き当れ」
△「突き当れッたって、何だかへんだなあ」
○「おい、ぐず〳〵するな、爺さんが行ってしまうと何にもならねえ、早くしろよ……」
△「何だかおかしいな……それじゃア突き当るぞ」
○「断るやつがあるか、早くしろ〳〵……アッ痛えッ、ヤイ何を突き当りやアがるんだ」
△「お前の方から突き当ったんじゃアねえか」
○「何をッ、何を生意気なことをぬかしやアがるんだ」
　ポカーリ。
△「あゝ痛え〳〵、オイ右だよ、左の方は腫物が……」
○「こうなりゃア区別しちゃアいられねえ、サア殺しちまうから覚悟をしろ」
△「あゝ痛え〳〵痛いってば、約束が違う〳〵」
○「違うもくそもあるものか」
　ポカ〳〵ポカッ。
　夢中になって喧嘩をしております。ところへ飛んで来た幸助さん、
幸「待て〳〵、待ちな、喧嘩は乃公に任せろ、待てッたら待たねえか」
○「ヘェ、これは薪屋の親方ですか、せっかくでござんすが、今日という今日は我慢が出来ねえ

んで。サアこの野郎、殺してしまうぞ」
△「来たな、サア殺せ〳〵」
幸「待て〳〵待てといったら待たねえか、乃公が悪いようにはしねえから、乃公に任せろ」
△「ヘエ、どうも御馳走様で……」
幸「何が御馳走様だ。喧嘩などをするな、乃公に任せろ」
○「ヘエ、じゃア外ならねえ親方のことですから、お顔に免じてお任せ申しますから、どうかいいようにお願い申します」
幸「よし〳〵、悪いようにはしねえ……オイそっちの人、お前さん大変殴られたようだが……」
△「ヘエ、三十六殴られました」
幸「殴られるのを勘定していることがあるか、お前さん乃公に任せてくれるかい」
△「エ、モウそれは始めからそのつもりで……」
○「よけいなことをいうな、任せろ〳〵」
△「ヘエ、お任せ申します」
幸「じゃア乃公が仲裁をする。ところでどういう訳で喧嘩になったんだ」
△「ヘエ、それがその……」
○「親方、そんなことはどうでも……」

幸「ナニそうでねえ、理由も聞かずに喧嘩の仲裁をしたといわれては乃公の恥だ。……そっちの人、どういう理由で喧嘩をしたんだか、その理由を話しねえ」
△「ヘエ、それは何でございます、私が天道さまを睨んでいたんで、そうしたらこいつが酒樽が転がって来るとこういうんで……」
幸「そんなことはどうでもいい、喧嘩の原因は……」
△「それが手掛かりなんで。犬の喧嘩に魚のアラをやって仲直りをさせたが、人間がアラが食えるかとこういうんで……」
幸「何のことだか訳が分らねえな」
△「こっちには分っているんで。殴ったり踏んづけるのが向うで、殴られたり踏んづけられるのがこっちで、左の頬ぺたは腫物があるから、右にしてくれというのに、見境なしにポカ〳〵やりやアがって、ヘエ、痛うございました」
幸「何のことだか訳が分らないが、つまり突き当ったのが始まりといった訳なのか」
△「ヘエ、それが約束なんで」
幸「約束というのがあるか……何しろ乃公が来たからは仲直りをさせなきゃならねえ、いっしょに来い」
△「ヘッ、しめたな」

幸「何ッ」
△「イエこっちのことで……どうも有り難う存じます。刺身に吸い物がありゃアけっこうでございますから……」
幸「何をいやアがる……サア来い」
　幸助さん二人を連れて料理屋へ参りました。やがて酒さかなが出る。両人たらふく飲んだり食ったり。
△「どうもいい心持になってしまった——兄い、又酒が飲みたくなったら喧嘩をしようじゃねえか」
幸「馬鹿野郎、何をいやアがる。モウこれから友達同志、喧嘩をするな」
○「ヘエ、どうも済みませぬ、——エ、親方」
幸「何だ」
○「塩焼きが食いたいんですが……」
幸「取って食ったらよかろう」
△「エ、親方」
幸「何だ」
△「私は鰻を食いたいんですが……」

幸「取って食ったらよかろう」
△「有り難う存じます、ついでに二人前ばかり折詰にして……」
幸「何をいやアがる。喧嘩をして土産まで持って行くやつがあるか……それじゃア又どんな大喧嘩がないとも限らねえ、乃公は一足先へ帰るから、お前達はゆっくり飲んでくれ」
○「エ、それはそのつもりで……」
幸「何をッ」
○「イエこっちのことで……どうも有り難う存じます」
幸助さん会計万事を済まして表へ出ました。
幸「あゝ乃公もいい顔になったなア。何しろ殺す、殺せという大喧嘩を、乃公にピタリと任せやアがった。乃公も顔が売れて来たよ」
幸助さん悦に入りながら横丁へやって参りますと、そこに義太夫のお師匠さんがございます。今一人のお弟子がお師匠さんに「桂川連理の柵」お半長右衛門の浄瑠璃をさらって貰っております。「柳の馬場は押小路、虎石町の西側で、軒を列べし呉服店、主は、帯屋長右衛門」という出で、その中に「親じゃぞえ、チエー、そりゃ、あんまりでござんす」という文句がございます。これは長右衛門の女房おきぬが、姑にいじめられるところで、義太夫の方では嫁いじめといっております。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong